

庄司興吉編著『地球市民学を創る：地球社会の危機と変革のなかで』（東信堂, 2009）

は し が き

「地球市民？ はあ、大きいですね」とよく言われます。「地球市民学」というと、「おお、ものすごいですね。そんなもの、あるんですか？」と言われることも稀ではありません。そんなふうに言われるたびに、以前は、なにか自分が大法螺を吹いているようにも思えてきて、引け目を感じてしまうことすらありました。

しかし、状況が大きく変わってきています。2008 年秋以降、アメリカ発の金融危機が世界に波及し、いたるところで経済危機に深化しつつありますが、それよりもずっと前からのことです。米ソ冷戦終結後世界各地に噴き出した紛争、南北間ばかりでなく新興国や先進国でも目立ってきた格差、温暖化問題を焦点に地球的規模に広がってしまった環境破壊、途上国でなお続く人口爆発と対照的に一部の国で進む少子高齢化など、国境を越えて広がり深まる諸問題と取り組む市民たちが増えています。

こうした背景のもとで私たちは、21 世紀にはいると同時に地球市民学科を立ち上げ、2005 年には大学院地球市民学専攻を立ち上げました。そしてその過程で、地球市民とはなにかを考え続け、さらに、地球市民についての学、あるいは地球市民がもっとも必要とするはずの学、について考え続けてきました。

市民とは、あなたや私、つまり、今の日本のような、普通選挙制が敷かれていて、自分たちの政府を自分たちで選び、それをつうじて国のあり方、行き方を決めていく社会の住民、したがって、自分の生き方を自分で決め、それをつうじて自分たちの社会のあり方、行き方を自分たちで決めていく人間のことです。

自分たちの生きる社会が小さく閉ざされていれば、私たちはそれとその環境だけを考えていても済むでしょう。しかし、今やそんな社会は世界のどこにもありません。グローバル化あるいはグローバリゼーションと言われ出してもうかなりになりますが、私たちの生きる社会は国境を越えてどんどん広がり、世界中が見えていて、世界中のモノが私たちにとどき、北極、南極やヒマラヤの氷の融け方までが、私たちの生活に影響を与えています。

私たちは、市民であろうとすれば、否が応でも地球市民たらざるをえないのです。

こういう私たちがどんな社会に生きていてどんな問題を抱えているか、それらはどんな歴史をもっていて、どんな構造を表しているのか、それらの意味を読み解き、解決のためのどんな戦略を練らなくてはいけないのか。私たちはどんな「変革」のどんな主体にならざるをえないのか。それらを考えることをつうじて、地球市民とはなにかを考えるのが地球市民学であるとすれば、それは同時に、地球市民たらざるをえない私たちが、いかに生きていかざるをえないのかを考える学にもなるはずでしょう。

この本は、少しでも、あるいは日々の生活に追われて忙しいなか時折でも、同じようなことを考える人たちと、私たちの思考——まだまだ試行錯誤ですが——を共有したいという思いでつくられました。思考でも試行でもあるシコウは、考えながら行動を続けるという意味で、思想と行動の双方を含みます。

どうか私たちのシコウ（試行=思考）に参加してください。

序にも書きましたが、私たちの考える地球市民学の概要を手っ取り早くお知りになりました

い方は、序のあと 5 章を読み、そのうえで第二部のどれか、自分の関心や好みにもっとも合った章を読んでいただければ、と思います。それで興味を持たれたら、もちろんそれが私たちの一致した望みですので、第一部、第二部のすべての章を読んでいただければありがたいです。

そのうえで、私たちの大学院地球市民学専攻は、働いている社会人の方でも通えるよう夜間と土曜日に授業や公開セミナーを行っていますので、それらに参加していただければいっそう有り難いと思います。

私たちの大学院のことは大学のホームページ http://www.seisen-u.ac.jp/departments/07graduate/02_4chikyu.html に載っています。また、年に 5 回おこなわれる地球市民学専攻公開合同セミナーのことは同じホームページのトップ <http://www.seisen-u.ac.jp/> で公示されます。

地球市民学はこのように私たち皆の学なので、どうぞこの学をつくる活動にご参加ください。この本がそのための手掛かりになれば、私たちの望外の喜びです。

この本の刊行にあたり、私たちの大学清泉女子大学から教育研究助成の形で刊行助成を受けました。清泉女子大学は世界に先駆けて地球市民学科をつくり、大学院地球市民学専攻（男女共学）をつくってきた大学です。私たちの試みをずっと支えてきてくれる大学、具体的には教職員の皆さんに、この際あらためて心から感謝したいと思います。

本書はセミナーでの話題提供の録音を起こし、大幅に手を加えた原稿で構成されていますが、セミナーの開催や話題提供の録音の起こしなどについては、大学院助手の馬場千枝子さんにたいへんお世話になりました。また、この本の原稿の整理と編集にかんしては、編者庄司の個人秘書井上久美子さんにもお世話になっています。お二人に心から感謝したいと思います。

最後に、といってももっとも少なくというわけでは決してなく、むしろその反対ですが、東信堂の下田勝司氏には、この本の刊行趣旨を十分に理解のうえ、年度末のもっとも忙しい時期の刊行に最大限のご協力をいただきました。深く感謝します。

2009年3月 編著者

目 次

はしがき

序 地球市民学という学問は成り立ちうるか？

庄司 興吉 3

第1部 地球社会論から地球市民学へ

庄司 興吉 13

I 地球社会論の背景（1）：世界社会論・国際関係論・比較体制〔社会〕論 15

はじめに 15

1 世界社会論 18

2 国際関係論 25

3 比較体制〔社会〕論 28

II 地球社会論の背景（2）：近代化論・従属理論・世界システム論 36

はじめに 36

4 近代化論 38

5 従属理論 44

6 世界システム論 49

III 地球社会論の背景（3）：国際社会論・現代思想・ポストコロニアリズム 55

はじめに 55

7 国際社会論 58

8 現代思想 63

9 ポストコロニアリズム 75

IV 地球社会論の構築：社会理論と現状分析の方法と成果 82

はじめに 82

1 問題解決と世界構成 83

2 問題から歴史をへて構造へ 87

3 共同性・階層性・システム性 93

4 生態系内在性の二側面：自然と身体 98

5 意味と戦略と主体 105

6 地球社会の総体把握 109

V 地球市民学の創造：序説・社会理論・現代社会分析・実践論 117

はじめに 117

1	市民とは？	
2	市民が社会をとらえる	1 2 5
3	新しい帝国と地球市民社会：市民がとらえる現代社会	1 3 1
4	市民が実践する	1 3 8
	第一部参考文献	1 4 7

第2部 地球市民学の諸相

VI グローカル公共哲学と地球市民学

	山脇 直司	1 5 7
	はじめに	1 5 7
1	公共哲学の概念と基本理念	1 5 7
2	グローカル公共哲学の基本理念	1 6 9
3	グローカル公共哲学と地球市民学に共通な課題	1 7 7
	参考文献	1 8 1

VII 地球公共財を創出する市民

	鈴木 直喜	1 8 3
	はじめに	1 8 3
1	地球規模の問題	1 8 4
2	地球規模の公共財	1 9 0
3	地球公共財供給の課題	2 0 2
4	まとめ	2 0 9
	注	2 0 9
	参考文献	2 1 0

VIII マイノリティの自決権と自治

	西立野 園子	2 1 2
	はじめに	2 1 2
1	自決権とは？	2 1 3
2	マイノリティと自決権	2 1 4
3	自治と条約化の動き	2 1 5
4	自治とケース・スタディ	2 2 0
5	今日的「自治」の特色	2 2 5
6	自治と自決権の関係	2 2 7
7	今後の展望	2 2 9

IX 地球市民の時代と多文化共生

——外国人の子どもの教育との関連で——

佐久間 孝正	2 3 1
--------	-------

はじめに	2 3 1
1 地球市民とは？	2 3 1
2 「共生」論の台頭	2 3 2
3 変わる外国人の集住地域	2 3 4
4 日本とイギリスのオールドカマーの比較	2 3 5
5 オールドカマーの教訓生かさぬニューカマーの受け入れ施策	2 3 7
6 2世、3世に上昇の機会はあるか	2 4 0
7 問題は構造的なもの：バラバラな地方教育行政	2 4 2
8 積極的な差別是正策を	2 4 7
9 おわりに：地球市民の時代とは	2 4 7
注、参考文献	2 5 0

X 包括的平和教育 Comprehensive Peace Education からみた地球市民学

松井 ケティ 2 5 1

はじめに	2 5 1
1 包括的平和教育とは何か	2 5 1
2 包括的平和教育の研究手法	2 5 5
3 授業での試み	2 5 8
4 議論の展開	2 6 7
5 まとめ	2 7 1
参考文献	2 7 3

X I 宗教間対話と異文化間対話からの地球市民学

塩谷 惇子 2 7 4

1 『記憶と和解』：キリスト教からの呼びかけ	2 7 4
2 宗教間対話と女性の視点からの異文化間対話	2 8 4
参考文献	2 9 6

X II 言語コミュニケーションから見た地球市民学

相京 美樹子 2 9 7

はじめに	2 9 7
1 コミュニケーションとは何か	2 9 8
2 なぜ私たちはコミュニケーションするのか	3 0 3
3 言語差が生まれる要因	3 0 5
4 非言語コミュニケーション	3 1 3
5 コミュニケーション能力	3 1 5

X III 通訳研究の文脈化と地球市民活動

實吉 典子 3 1 9

はじめに	3 1 9
1 コミュニケーションの必要性	3 1 9
2 通訳研究の実態	3 2 1
3 通訳の定義	3 2 4
4 通訳の種類	3 2 6
5 通訳のプロセス・モデル	3 2 9
6 通訳者と地球市民的視点	3 3 3
7 おわりに	3 3 5
注、参考文献	3 3 6
事項索引	3 3 8
人名索引	3 4 7
執筆者紹介	3 4 9